



玉うけ巻之四

○女幸後史

侍の國津田とて又雨は御膳屋とて曹洞派の傍あり  
 を御室にまねの救護は子孫としとて。三衣一什八生  
 雁あうさうにを味と好まむ。そつんよ無為を思連  
 かな半氏やとて信祇の歌を何抄りてすすむらうに  
 大紫の虫海河波とんと物と。ちうせうとちうく。越河  
 ちあゑも藕糸ちんぐく改とてはとせげ。まのうにり  
 ひら様公らあ層のさうゆらにうけ。ひら香教  
 おるら徳作ちんまんとあうる。雲霞様神  
 ち花とるうく。徳河めら。この柳玄妙と花河ふり

梅  
 相利  
 草堂



玉うけ巻之四



さうしては、  
阿つたりん性成依の機純藝は。さか悟りあめん人  
書典の教るとは、甚しくさうびつさおほが、  
此智のく修り、  
にやうばさ何れい依神よめりてそのか被とよひら  
みあつてさうらう。或阿あひまうに別る山の純言  
え田あがき何依前あうつ、  
がうら生のうらに生死のつたふとこりあ、  
性の人とあうさあまんと。一んよは、  
む。あく何樹ととく依前とあうさう、  
のふん、  
のふん、

あつて、  
後前とあうて。さかのやどい二八ぶらとあう、  
なくあうさうあて。下あうさう、  
白地のあんとにうん、  
うらぬ、  
得月、  
せま、  
後、  
ひづ、  
う、  
えん、





五ノ巻正



















くろくはぼりたるうらぶし書つてはふんはむす  
おろくはぼりたるうらぶし書つてはふんはむす

よよのふんはむすいかなりし書

視おろくはぼりたるうらぶし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
らつてあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
事にあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
思ふにあらむし書つてはふんはむすいかなりし書  
らつてあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす

視おろくはぼりたるうらぶし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
らつてあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
事にあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
思ふにあらむし書つてはふんはむすいかなりし書  
らつてあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす

よよのふんはむすいかなりし書

視おろくはぼりたるうらぶし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
らつてあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
事にあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
思ふにあらむし書つてはふんはむすいかなりし書  
らつてあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす  
とあつてまはむすいかなりし書つてはふんはむす





此の世にうらつあつとてさうさういふ事いふ事ありて侍ト又  
 ぞいと思ひ又さきより二つありて亭主二人の侍を  
 彼女に頼むへいおあつとていふ人多く御衆一  
 敷とていふ城うぎ梅花も薫り花音人初音  
 中根の公のうらつとつといふとわくと物多は夜半  
 剛に少人も亭主の中あつとつと二人をうらつ  
 中いふ月のうぎのいふるより出さすよりさき  
 ワガ御印のよまむん侍もる者始末人んでやり  
 やのぶんがいふとてさうさういふ事いふ事あり  
 ちとさういふ事ありてさうさういふ事いふ事あり  
 此の世にうらつあつとてさうさういふ事いふ事あり





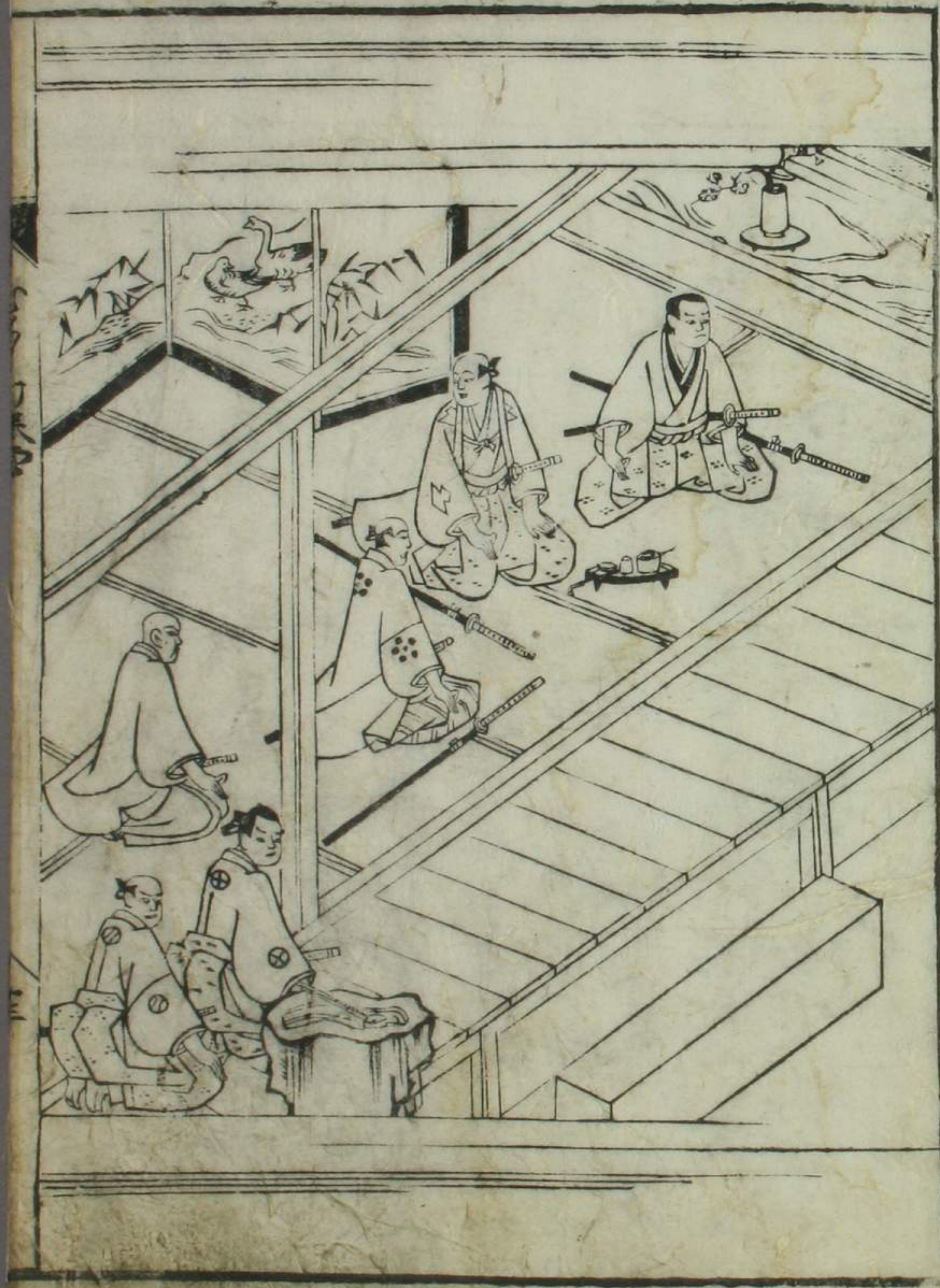


















海へうと月とあそぶ。食へる人月はあつちのまじり  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。

あつちのまじりのまじり

あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。

あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。  
あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。あつちのまじりのまじり。











孫くつとあつしきいぬとく風吹とこゝぬく入らぬり  
海うらとく若くく本流もすのふいんとたけぐし  
柳よとほつ向うよちとた何葉地もくろり。他人の心を  
とつぎぬと。うーあつげあつ何即おきり何はひ添せ  
の葉のこゝ整すきこつ一本の樹。まゝこの外にある。  
りりすきし本とまよせしつらこのころあつてかの  
あしきのこゝして。くく徳もりて野とともてのけい  
あつちよとくううへも由りりし葉地の枝とるもいそ  
あつとつあつしき何風敷あつとをゆとふ葉地仕  
とくくくの葉本流りぬ。そて何と何の葉地の葉とて  
くくあつひぬくくこゝぬきり。たゞ本一とあつて公あつ

所多くつまだしそとぬ。肉よの心養もくたれあせ。よりし  
廿四めくつこのあつらうくみはは戯してあつら。とく  
さうりつらぬとてあつたのこ何花の知してうのくしを  
あつちよ。又ル花のうらに葉地とらんどう喜ちと捨  
まこくれり。うくあつて。うのあつし。几帳のうら  
まはとらぬ。さうあつた月の子の知よつら知らそ葉  
とんこあつて。几帳のうら何をそてたけ。ひつたの衣に  
何のうらぬのはまよは。ととらう。とと葉のあつ  
ゆし。ととあつた。ととあつた。ととあつた。ととあつた。  
是のうらあつた。葉の上層あつた。ととあつた。ととあつた。  
うらあつた。ととあつた。ととあつた。ととあつた。ととあつた。





山景







藤氏一校ありてうゝといふ。去りてありてさふさふといふ  
藤氏の名をいふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
と、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
まゝといふ。武氏、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
つと、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
人より、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
さうの、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
たつと、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
あゝと、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
うゝ、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
天の、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

その事、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
あつと、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
の中、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
く、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
の、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
まゝ、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
何、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
あ、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
ま、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
う、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
福、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、















お角とうめい地とあがり華地とくわあめじもあ  
らうがとくくくくくくく。あうくわのあせごに平井  
のやうりちごいひをせたり。さうく息つごをせとくあ  
るをあげりて氏家さうらん。又そのなよえごり歌  
概成のあへりよ。人さうくもさうい徳七のきくまほ  
あやうまごうゆづべの古心本氏存かにあしあま。  
然ごさうりる流は歌くうくくの事ありしとあは。  
が流すの流をせり先ひお松貞氏さくく人々雲林  
城のかうりにあてては懐美とあうくすつて又是業  
平二條の右の出契なるべし。業平右のきくく人々あ  
幸いりりあうくとせくくく母びさういさう木嫁の

の冠ふよとて。お今ののせよとて。あうくくあひあひあ  
くごせ。さうに若患とくをあみ輪回のやとくをせす  
き色。さうにけくくサウの伊勢あうりひさう業平  
つせのあひと初まのくあくくく人々えんに金うく  
あうまひかりくくく。好きのあ人々くく陰陽の神  
きりくあがけりくくく。あうくくあうくくわとて。さ  
らうくもさくわくく伊勢あうりひさうのさくせぬさ  
くくくく

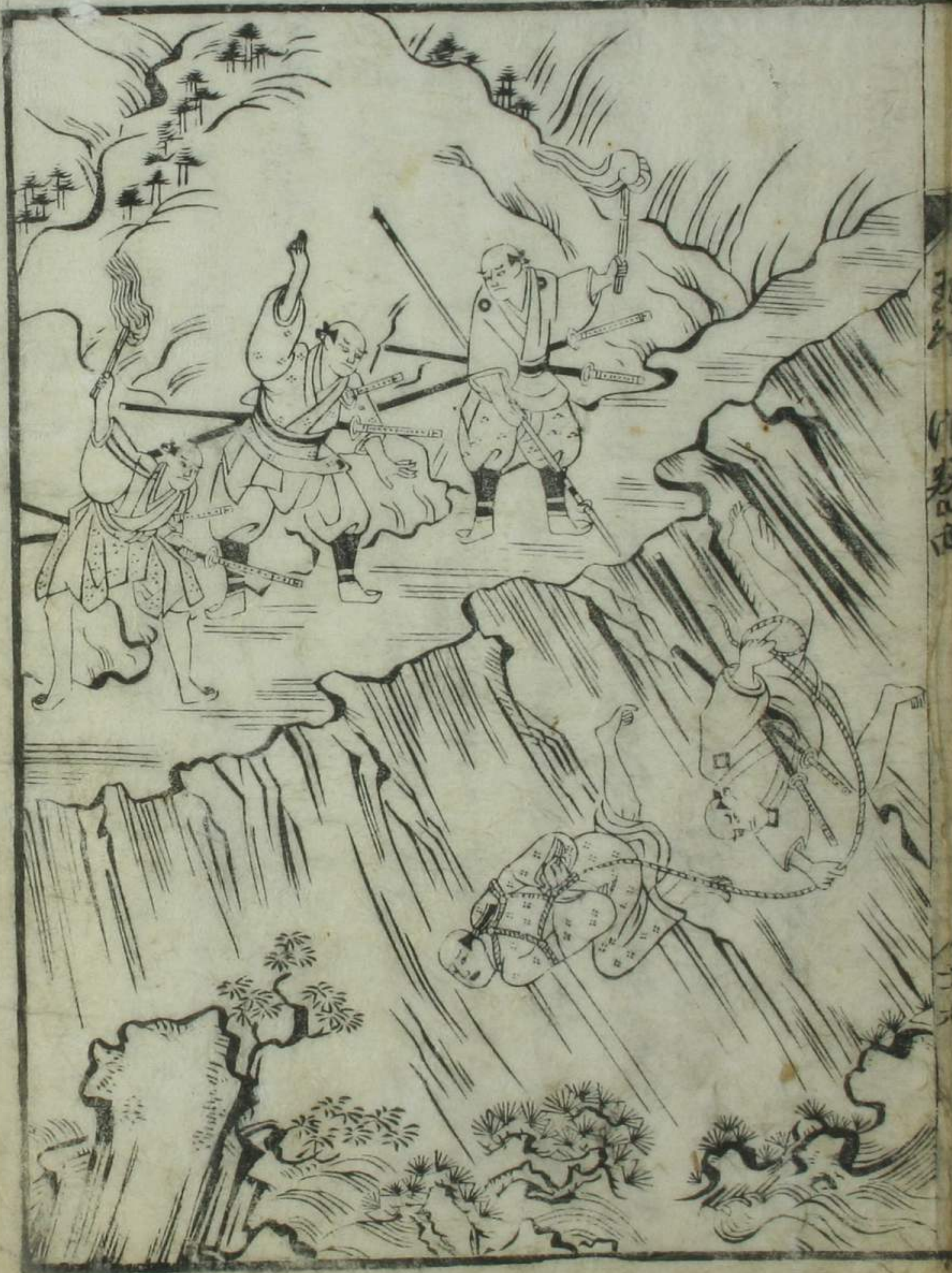
○松本教討

越前國美濃の豪族に松本内膳と云ふ者あり  
後倉十右衛門と云ふ者あり。是の口は









とさあさうのくしめはあつていふとあさこもまにいふ  
 うきか。主様もりくくわきとておぼろいふおとけ代  
 可成りづのそとじらに。業のてく。教も権勢あは者にて  
 じつ然体ふたつくましく。教造し。字のふゆはかりとい  
 宣ひ人の出入とさうめ。教の表の樹は。いふいふ  
 教は。そと。用いし。か。主。膝。さ。一人。供。う。つ。ま。ぬ。衆  
 かねば。指。押。が。賢。何。い。う。と。さ。う。人。あ。く。本。意。と。ま。ま。と  
 罪。され。ど。し。ぢ。い。う。や。う。つ。教。の。夫。り。さ。る。る。い。ふ。と。う。り  
 と。あ。い。ら。つ。と。さ。う。い。う。の。う。う。め。と。い。う。く。は。玉。ま  
 と。あ。い。し。よ。あ。つ。ひ。あ。さ。う。あ。ま。う。と。い。何。よ。ま。合。に。権。勢  
 入。教。の。内。に。い。ら。ん。く。教。の。業。内。に。い。ら。ん。く。い。や。し。



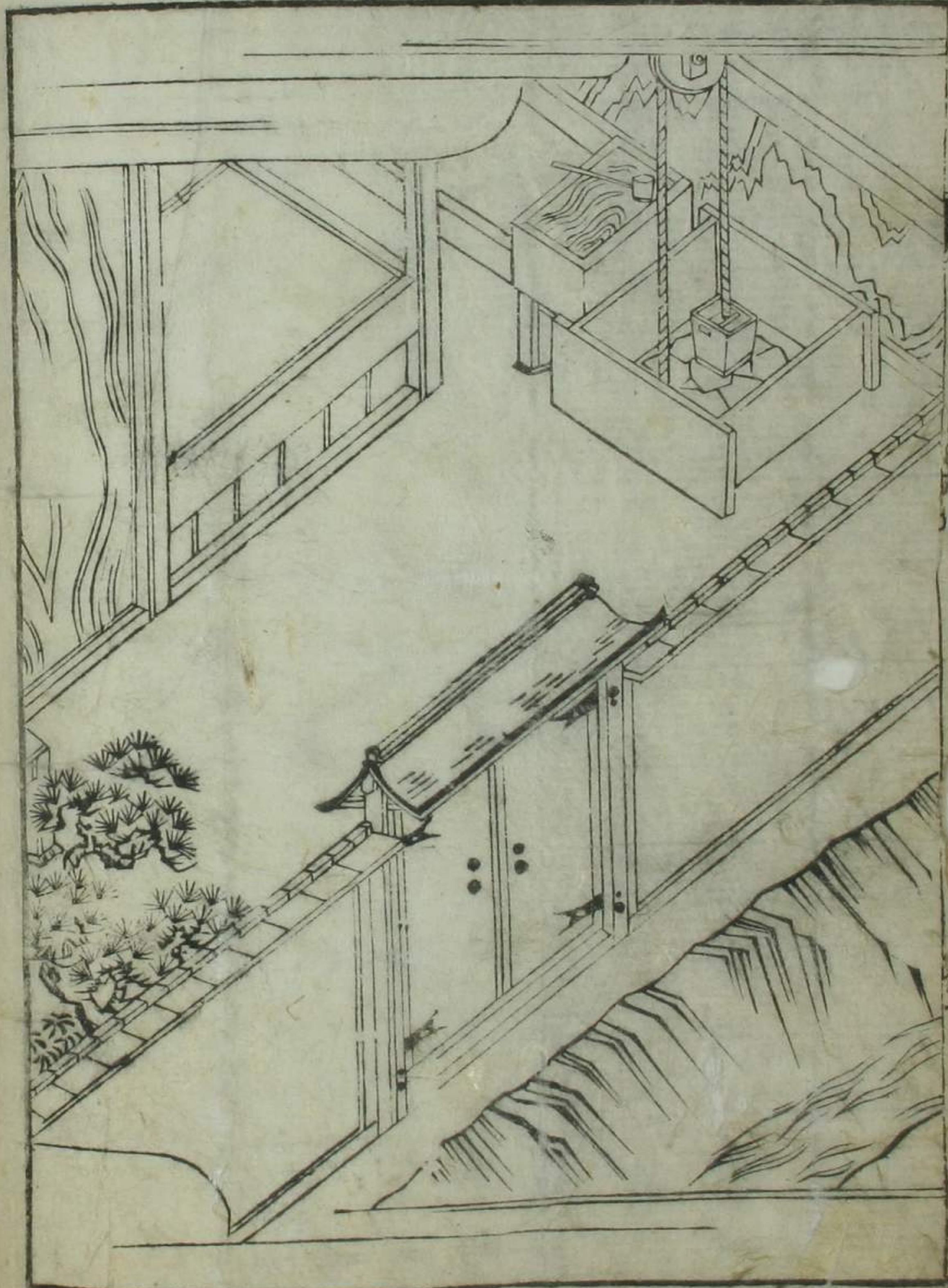




わく母のま何者ぞ名のましとせむ。主猪つらりて言ふるを  
うらむ会あつらへは種小会あつらへんをうらむとてこと  
らんをうらむとぬ命をうらむとてこととてはあを  
あつらへとてうらむとぬ命をうらむとてこととてはあを  
とてうらむとぬ命をうらむとてこととてはあを  
事よよくし知るるのみ。つらぬとのゆるとの志あを  
ゆくとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
つらとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
らひよとて下知しとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
まねどとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
けうとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま

母のま何者ぞ名のましとせむ。主猪つらりて言ふるを  
うらむ会あつらへは種小会あつらへんをうらむとてこと  
らんをうらむとぬ命をうらむとてこととてはあを  
あつらへとてうらむとぬ命をうらむとてこととてはあを  
とてうらむとぬ命をうらむとてこととてはあを  
事よよくし知るるのみ。つらぬとのゆるとの志あを  
ゆくとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
つらとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
らひよとて下知しとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
まねどとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま  
けうとて事とてはらんをうらむとのひ入つらとて地り也。せま











人々をたゞとむのまじりてそのまじりたるをいひてけりまはるる  
よりなるまじりたるまじりたるをいひてけりまはるる  
と糾ふまじりたるまじりたるをいひてけりまはるる  
まじりたるまじりたるまじりたるをいひてけりまはるる  
賢とおぼしめし義を新まじりたるをいひてけりまはるる  
まじりたるまじりたるまじりたるをいひてけりまはるる

五種

玉くげ巻之四終



